

—日本語母語話者との接触を増やすために—

菅 摂子（関西学院大学日本語教育センター）

1. 授業概要と実践の背景

筆者が担当する「日本語会話」は、中国からの学部編入生および派遣留学生を主な対象とする選択授業である。各学期とも初中級と中上級レベルの2クラスあり、相手との人間関係や状況に応じて適切に話せるようになることを目標としている。

会話能力を伸ばすためには、教室外での日本語使用が不可欠であるが、受講生の多くは決まったアルバイト用語を繰り返すにとどまっているようである。そこで、少しでも母語話者と話す機会を増やすために、教室外で行うタスクを取り入れることにした。

2. タスクの内容と実施方法

タスクは2つあり、一つは、大阪弁を学習した流れで①大阪人の特徴について紹介されたテレビ番組を視聴し、その内容が本当かどうか確認してくるというものである。話の展開の仕方は授業で事前に練習する。もう一つは、「ほめ」を学習後、②母語話者をほめ、そのほめに対する返答に注目するというものである。このタスクは、ほめの返答のバリエーションに気づいてもらうことも目的としている。いずれのタスクも学生はタスクシートに記入し、授業で結果を共有する。タスク②については、相手との上下・親疎関係や自分のほめの発言も記入することとしている。

3. 学生の反応と今後の課題

報告によると、母語話者と話すことで新しい発見を得た学生が多く、特に番組内の情報と実際の違いを教えてもらったり、予想外のほめの返答があったりした場合、「おもしろかった」「教科書と全然違う」という反応であった。

今後の課題としては、まず、タスク①において、一部の学生は一問一答のやりとりで終わっていたため、質問の数を絞り、質問内容に関する追加情報も必ず得るように指示したい。次に、タスク②については、誰からも「ありがとう」しか返されなかった学生がいたため、異なる返答が得やすい同等のある程度親しい人を中心にほめるよう指示を加える必要がある。最後に、短いやりとりで済むタスク②に比べ、やや時間を必要とするタスク①の方が実行することに負担を感じる学生がいるようであった。今後はこの点についても十分考慮しながら、改善を重ねていきたい。